
荒国に蘭

亜薇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

荒国に蘭

【Nコード】

N4162BA

【作者名】

亜薇

【あらすじ】

「何があるうと、私は逃げたくない。」比類なき神力と武才、絶世の美貌を与えられた少女麗蘭。孤児として育ちながらも、自分にはない特別な『宿命』があることを感じ取っていた。大国の侵略にあえぐ帝国の『皇女』であり、天帝に仕える『神巫女』でもある麗蘭が、己が使命に目覚め仲間と共に成長していく物語。【荒国に蘭】では、麗蘭は皇女という自分の身分を知らず、都を離れて山奥で暮らしている。世にも美しい邪神『黒龍』やその異母弟『邪龍』などの敵、仕えるべき天帝『聖龍』と出会い、戦いの道へ進む

決意を固めてゆく。() 作者サイト「楽園喪失」に載せたものに修正を加えたものです。()

序

其の昔

神々の王 天帝 聖龍神は

此の世に蔓延る数々の悪から力弱き人間を救うべく、
己の神力を与えて一人の女をお創りになった。

彼女の女、名を 霜 奈雷

清麗かつ聡明、偉大な神力を用いて妖を討つ
“神巫女” “光龍” である彼女の女は 死ぬ度に転生する魂を持つ。

五百年ごとに生を受ける光龍
大いなる力でその度使命を全うする。

奈雷没後千五百年、
新たな光龍 清 麗蘭
人界に再び下される。

序

暗く、湿った洞穴の中。もう何百年も人々に忘れ去られた地である。

静寂が流れ、時折滴り落ちる水の音のみが鳴り響く。

…突如、そこに光の筋が現れた。

全てが静止しているその場所で、それは一際神々しく映る。

眩い程の光の洪水の向こうからまるで空間に浮き出るように、「
彼」は静かに現れた。

細く滑らかな黒い髪にすらりとした体躯、黒曜石の如く輝く黒い
双眸。一見女と見紛う、此の世のものとは思えぬ程の美貌。

「やっと、出て来られたか。」

その美しい声は、冷たい空気に乗って低く鳴り響く。

「…千五百年。恐らく未だその程度だろう。それにしては、随分長く待ったように感じるものだ。」

外套を翻し流れる長い髪を白い手で結び上げた彼は、ゆっくりと歩き出す。そして、側に倒れていた白刃の剣を拾いその刃に目を落とす…凍り付くような笑みを湛えたまま。

「兄上、こんな封では長く保^もたぬと分かっていたであろうに。」

その笑みは、全てを呑み込む程深遠な、闇。

「…僕は僕の、『宿』^{しゆく}を果たすでしょう。此の道を選び取ったのだから…」

降臨（前書き）

主人公、麗蘭誕生。

降臨

聖安帝国が北方、帝都紫瑤しやうの中央にある燈鳳宮。

嵐：大雨と共に雷鳴が轟く日　聖安の第一皇女麗蘭が生を受けた。

此の帝国では特別な場合を除き、第一子が第一位の皇位継承権を持つ。ゆえに、此の麗蘭は生まれながらに女帝となる「宿」をもつ皇女だった。

「お生まれになりました。皇女さまでございます。」

赤子を取り上げた下女が嬉しそうに告げる。

皇女誕生の報を聞き付け、皇帝や控えていた十名程の臣たちが産室へとやって来る。

それは龍王朝と呼ばれた時代の、甬帝じゆうの治世二年目、盛夏の日。

「珍しい深紫の瞳。まるで玉のようではないか。」

年若い皇帝はたった今授かった娘を抱き、満面の笑みを零す。命の力に満ちた産声を上げて、その姫は此の世に迎えられた。

「屹度聖妃きどのように美しく、気高い女帝となるに違いない。」

未来の女帝となるその赤子を見て、聖妃の寝台から離れた位置に控えている臣下たちも嬉しそうに微笑んでいる。しかし、穏やかで幸せな時間は長く続かなかった。

「…陛下！　その御子の、左肩に…」

最初に気付いたのは、禁軍属の女將軍璋風友ふうゆうだった。

「…これは、まさか…」

甬帝が言われた通りの場所を確認する。自らの腕の中うでにいる小さな娘の小さな肩に、確かにそれが在った。

「天帝聖龍神の御印…？」

人界、天界、魔界。

此の天治界てんちがい全てを統治する神々の王、天帝聖龍神。

麗蘭の左肩にはその僕である証、白龍の印がはつきり表れていた。それが意味することは只一つ。彼女が神巫女「光龍」であるということ。

「光龍は五百年に一度人界に下されるといいます。では、此の姫が正しく…」

風友がそう言いかけた時。

「何ということ…！可哀相に…こんな時に…」

皇女の母、皇妃である聖妃は、半ば悲痛とも取れる面持ちで寝台から身を起こした。

本来ならば、世継ぎが神々に愛される神巫女であることに感謝し心より祝福したいところだが、今の此の国では難しいことだったのだ。

「此の御子を此のままにしておけば、珠玉が黙っていません。」

聖安は数年前より、東の大国茗^{めい}帝^{てい}国と戦争状態にあつた。茗の女帝である珠玉は、帝としても将としても大陸六国中にその名を知られた女傑。人界全統一という途方もない野心を抱き、一国一國兵を送り、戦争を起こして侵略を繰り返していた。

彼女は冷酷な悪女として、自らの野望のためには手段を選ばない女。神にも等しい力を持つ神巫女が生まれたと知れば、必ず利用しようとする手打ってくるだろう。

聖安は六国の中でも決して弱い国ではなかったが、十数年前王朝が交代したばかりで国内の混乱が続き、更に年若い甬帝と聖妃の統治も日が浅く真つ先に珠玉の標的となっていたのだ。

「どうしたものが、聖妃よ…」

麗蘭、と名付けられた小さな姫は、何時の間にか眠っている。彼女を見守る父や母、そしてその場に集った忠臣たちの心配など何も知らぬまま。

聖妃はその安らかな娘の顔を見てから、目を逸らす。

「陛下、隠しましょう、此の姫を。」

「…何？」

甬帝だけではない、その場に居合わせた重臣の誰もが、自分の耳を疑った。

「…風友。」

「此処に。」

聖妃の呼びかけに答え、女將軍は前に出る。

「此の子を此処から連れ出し、武の術や知恵を授けて下さい。」

「聖妃、何という…」

「無謀、とは承知。けれど、此のまま此処で成長すればほぼ間違いなく珠帝の知ることとなり、奪い去られかねません。」

珠玉は、自分より上のものを認めない。支配下に置くことが出来なければ、麗蘭に危険が及ぶことは必至だった。

「神巫女をお守りするだけでなく、わたくしたちには娘を守る義務があります。」

「陛下…」

聖妃は揺るがず、風友を見上げる。

「麗蘭には、何者にも屈することのない強い子に育て欲しい。」

周囲は沈黙を守っている。聖妃の固い決意の眼差しに、甬帝は重々しく頷いた。

「…わかった、そうすることとしよう…引き受けてくれるな？璋將軍。」

「…御意。及ばずながら力を尽くします。」

その言葉を確かに聞くと、甬帝は重臣たちに向かって告げた。

「皆、聞け。世継ぎの皇女『麗蘭』は、時が来るまで璋將軍のもとに預けられ、一平民として育てられる。本日皇女が生まれたこと

は、此処にいる者のみ知るものとし、口外した者は厳罰に処する。」

甬帝の言葉通り、麗蘭の誕生は隠された。皇宮中、そして国中に、第一皇女が死産したという報が伝えられる。

国中が悲しみに暮れる中、麗蘭は秘かに「宿」を以て下されたのだ。

邂逅へ1 (前書き)

麗蘭7歳。

これで7歳?という感じですが…

邂逅〈1〉

かくして第一皇女麗蘭を託された風友は、將軍を辞し帝都を離れ、帝国の南方に位置する阿宋山あそうざんで小さな“孤校”ここうを開いた。

“孤校”とは、身寄りのない子供たちを集め住まわせ、学問を教える場所である。

麗蘭はいずれ帝都に戻り、皇位を次いで女帝となる身。彼女を預かり育てるには、他の臣下に示しをつけるため風友が將軍で居続けるわけにはいかなかったのだ。

あの、嵐の日から七年。

麗蘭は風友と共に、十数人の孤児達と暮らしていた。

自分が皇女であるを知らず

神巫女「光龍」であるを知らず

「お早うございます、風友さま。」
「お早う。」

風友はその長い髪を後ろで束ねて背に流し、静かに畳の上に正座

している。麗蘭も師に向かい合って腰を下ろした。

聖安禁軍にその人ありと言われ、甬帝や聖妃の厚い信頼を得ていた風友は現役を退いて久しい。しかし未だ三〇代半ばと歳若く、孤校で子供たちを育てながらもかつての同胞たちと連絡を取り、激しさを増していく茗との戦いで少しでも故国の力になるべく動いていた。

少女の頃から軍人として活躍してきただけあり、ぴんと伸びた背筋や所作から厳しく引き締まった美しさが垣間見える。落ち着いた雰囲気や表情、身のこなしが彼女を実年齢よりもやや上に見せていた。

「昨日、瑋加將軍くんかにお会いしたよ。またお前の弓を褒めていた。」
「左様ですか、嬉しゅうございます。」

麗蘭はほんの少し、頬を赤く染めながらもはきはきと応える。それはまるで、嬉しさを押し隠しているかのような微笑ましい様子だった。

珍しい太陽色の髪を高く結び、長い睫毛に縁取られた瞳の色は深い紫。形の良い鼻に柔らかな唇、薔薇色の頬。麗蘭は、正しく神に愛される巫女と呼ばれるに相応しい、美しい少女に成長していた。

年のわりに大人びてしつかりした顔付きに、真っ直ぐ背を伸ばした凛とした姿。幼くして、他の子供たちとは違う高貴な品格を兼ね備えていた。

孤校の子供たちは、毎朝主室で揃って朝餉を取る。風友に学問を教わるのも主に此処だ。

子供たちが楽しそうにお喋りをしている中で、麗蘭はたった一人いつも輪に入らずにいた。

「また麗蘭が風友さまに褒められている。」

此処にいる子供たちは、ほとんどが麗蘭よりも年上の子ばかり。学問も武芸も、他のどの者よりも抜きん出て優れている麗蘭は、そんな彼らに妬まれ敬遠されていた。

無論、風友が麗蘭を鼻屑目に見ていたわけではない。彼女の才は紛れもなく本物であるということと、子供たちが麗蘭に偏見を持ち、それを疑わなかった所為である。

風友は何かと麗蘭が孤立しているのに気付いていた。しかし、敢えて何も言おうとはせず見守っているだけだった。

「麗蘭、食事が終わったら外に薪を取りに行ってくれないか？」
「わかりました。」

いつものように静かに朝食を取り終わると、麗蘭は席を立った。

麗蘭は、風友の言い付け通り薪を抱えて蔵を出た。

近頃森にはよく魔物が出るようになった。子供たちは「自分たちだけで孤校の外を歩き回るな。」と風友に言い聞かせられている。

しかし麗蘭は違った。既に彼女は、自分の身を守る術を身に付けている。

物心付いた頃から、麗蘭は自分が他の子供とは違うことに気付いていた。皆が感じ取れないものを感じ取ることができ、誰よりも弓、

剣で優れ、誰よりも学問が良くできた。

そして、何より彼女は知っていた。

自分には何か、やらなければならぬことがあると。

誰に教えられたわけでもない。ただただ知っていた。自分は何か、特別な「宿」を持って生まれて来たのだと。

子供たちは皆麗蘭を遠ざける。麗蘭も、自分は彼らと相容れない
と思っっている。

皆と自分が違うのならば、自分は何のためにいるのだろうか？何
をすればいいのだろうか？

彼女はいつもそのことばかり考えていた。

そしてそれを、育ての親である風友にすら話せずにいる。

「雲行きが怪しい…早く帰ろう。」

麗蘭は薪を抱えたまま山道を駆け上がる。

雲行きだけではなかった。

麗蘭は、森の様子がいつもと違うことに気づき始めていた。

突然、ぴたりと足を止めて振り返る。何か、暗く気味の悪いもの
を感じたのだ。

それは優れた神人かみひとでなければ感じ取れない邪悪の気。

神人とは神力を備えた人間のことで、稀に生まれる貴重な存在で
ある。風友や麗蘭、聖妃も此れにあたる。

麗蘭は薪を道の横に置き、背負っていた弓と矢を手にした。
がさがさと、物音がする…近付いて来る。

そしてその邪気は、一つから二つ、三つ、四つに分かれていく。
やがて、邪気はその正体を現した。

黒い鬣、大きな狼のような異形が真赤な目をかっと思開いている。
それが廳蠱ちようこという妖だと彼女にはわかった。

未だかつてその魔物を直接目にしたことはなかったが、風友から
学んだ妖怪の知識、そしてこれまで感じた事のない程の邪気から彼
女はそう判断したのだ。

何故、こんな所に廳蠱が？

妖の中でも強い妖気を持つ此の異形が四頭も。此の状況は稀とい
うより異常だった。

彼女の記憶によると、廳蠱は魔界の妖怪で人界に出ることはない
はずだ。

麗蘭は後退おとひりする。一人で、弓矢だけという装備で、相手に出来
るとはとても思えない。

そうしている間にも、化け物はじりじりと麗蘭を追い詰める。し
かし、彼女は悲鳴一つ上げない。彼女は知っていたのだ、此処で動
じれば、その瞬間自分は化け物に喰われると。

麗蘭は意を決し弓を構える。そして、大きく息を吐いた。

「…来い！」

凜然とした彼女の声に応えるかのように、四つの黒い塊が彼女に

襲い掛かる。

鋭い爪を剥き出しにして、一足飛びで向かって来る。あの爪にやられては一溜まりもないだろう。

麗蘭は狙いを定めて弓を引く。その矢は見事に命中し、一頭の片目を射抜く。射抜かれた一頭は、堪らず森の奥へ消えて行く。

麗蘭の矢尻には、妖怪が嫌う「呪」^{しゅ}をかけてある。ゆえに、急所に当てれば一本でも効果を發揮するのだ。

残りの背後からの二頭、正面からの一頭の爪を避け、今度は化け物の後方から引く。

一頭の頭に命中したが、射られた廳蠱は倒れる寸前麗蘭の背中を引き裂いた。

「くっ…！」

背中に熱が集中して行くのが分かる。感覚が麻痺しそうになる程の、じんじんとした激痛が走る。

反射的に右手を翳し、攻撃の呪を唱える。すると眩い光が放たれ、神力で残りの廳蠱が吹き飛ばされた。

しかしそれは時間稼ぎに過ぎない。此の一撃でかなりの体力を消耗してしまった。

小さな身体に大きな傷、流れていく血。立っているのがやっとで、痛みに耐えるのがやっと。

体勢を立て直し再び向かって来る化け物に、弓を構えるのが遅れる。麗蘭は瞬間、諦めかけた。

「麗蘭…！」

聞き覚えのある声が森中に、響く。

…風友の声だ。

走って駆け付けた風友は抜剣して二度大きく振り、二頭の化け物をばっさりと斬る。

赤い血を上げ、断末の呻き声を上げながら倒れた怪物は直に動かなくなっていた。

「風友…さま…」

安心した途端、麗蘭の身体を支えていた緊張が一気に解ける。

化け物の姿、風友の姿がだんだん揺らいで、見えなくなつてゆく。

血が流れすぎた。死ぬのか？此処で…こんな所で…！！

「麗蘭、しっかりしなさい！麗蘭！！」

風友の声が小さくなっていく。

彼女の姿、周囲の景色…何もかもが、視界から消えていった。

邂逅へ1（後書き）

次回、登場です。

邂逅へ2 (前書き)

作者が大鼻肩のあのお方が登場。

邂逅へ2

寒くて、暗い。
そして恐ろしい。

此処は何処？誰もいない。私一人だけ…？
違う。誰か…誰かの声がする。

「麗蘭。」

低い、大人の男の声だった。

「お前は…誰だ？」

視界を覆い隠す暗闇で、男の姿を確認することはできない。
彼女の問いかけには答えずに、彼の次の言葉が飛んでくる。

「…やっと、見つけた。幾万幾千の夜を越えて、漸く会えた。」

「誰だ？そこにいるのは…」

次の瞬間、闇が晴れ、視界が開けていく。見たこともない光景が
目の前に広がっていく。

見慣れた阿宋山の森ではない。薄暗く、動物達はおろか、風の吹
く気配すら感じられない静寂とした森。

…現れたのは、一人の男。黒の双眸に高く結い上げた長い黒の髪。

その異様な“気”で、麗蘭には彼が人ではないことが判る。

足音も立てずに彼は麗蘭に近付いていく。近くで見ることにより彼の「異質」に気付く。

麗蘭の目の前まで来ると、彼はその美しい貌に穏やかな笑みを浮かべた。

「僕は、いと高き叛逆者。」

彼の言葉で、麗蘭はそれが意味するものをすぐ理解出来た。

天帝聖龍神が統治する此の天治界において、「いと高き叛逆者」が示す者はたった一人。

「黒…龍…?」

それは、古くから伝わる黒の神の名。

幾百の神々が存在するという此の世界で、黒い髪、黒い瞳をもつ神は黒神こくしんしかないという。

黒龍神こくりゅうしんは、静かに微笑んだまま。その黒曜石のような深い瞳に惹きつけられて、吸い込まれそうになる。

なぜ、こんなに悲しい目をしているのだろうか？

「君は、いずれ知ることになる。君は一体何者なのか、何処から来て何処へ行くのか…君の『宿』は何なのか。」

宿。それは、全ての人間が神々に与えられた、今生で為すべき使命のこと。

「君はこれから、長い長い旅路をゆかねばならない…君は普通の人間とは違う。それは分かっているね？」

麗蘭は頷く。

「君の宿は魂に刻まれている。君の魂は、死んでも再び転生し、神々のため、人間のために、人界の悪を滅ぼすために戦い続ける…君は『光龍』。『神巫女』という名の、神の傀儡。」

彼女には、此の神が何を言っているのか、直ぐには理解出来なかった。

「安穩は許されない。君は此の先、その女の身で果てのない試練に挑まなければならない…しかし、逃げることは可能だ。君は選択することが出来る。」

「…逃げる？」

麗蘭は此れまでずっと、自分が与えられた「宿」は何なのか、答を求め続けてきた。自分が為すべきことは何なのか、探し続けた。

「逃げるか、戦いの道へ入るか二つに一つ。君は選なければならぬ。」

ほとんど間を空けず、考えることも無く…自分でも不思議な位、自然に麗蘭は首を横に振っていた。

「何があるごと、私は逃げたくない。」

黒龍神の言うことは、完全には解らないけれど。
兎に角、自分は逃げたくない。只それだけだった。

彼女の一片の迷いもない強い言葉を聞いて、黒龍神は再び微笑んだ。

「…それもいい。では今此の瞬間から、僕と君は敵同士…次に見える時は、君は僕に敵意を抱いているだろう。」

黒い神は、踵を返して歩き出す。そしてその姿を再び森の深くへと消してゆく。

「また、会おう。その日まで『宿』の通り己を貫き、戦い続けることが出来るかどうか…楽しみにしているよ。」

彼の姿が見えなくなると、再び辺りが暗くなっていく。何も見えなくなっていく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4162ba/>

荒国に蘭

2012年1月11日00時46分発行